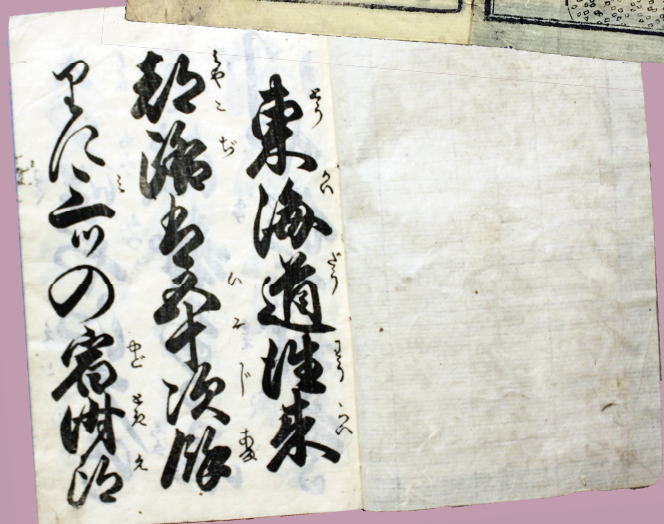
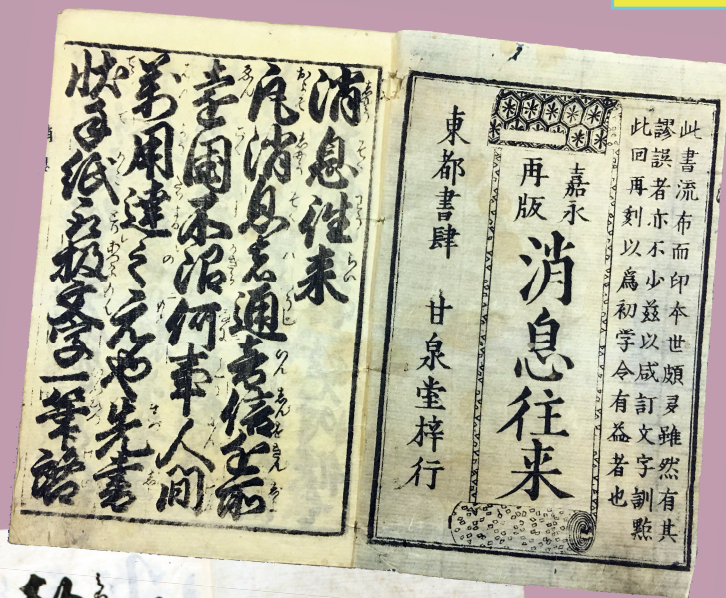




令和元年度第1回企画展

身のまわりの生活史 11

まなぶ



ごあいさつ

江戸時代の日本では、世界でもトップレベルの識字率であったということは、割と知られている話ではないでしょうか。その理由として挙げられるのが、寺子屋の存在です。

寺子屋はその文字が示すとおり、もともとは中世の寺院において、僧侶などによる町人のための学問所が設けられたことがその始まりでした。江戸時代になり、生活の様々な場面で文書の作成が必要になっていくと、子どものうちから文字の書き方や読み方、簡単な計算などを学べる場所が必要となり、寺子屋は都市部だけでなく、地方の村々にも広まっていきました。こうした寺子屋で教えていたのは僧侶だけでなく、名主などの村役人や地域の有識人などがその役割を担いました。

資料館が収蔵している古文書をつぶさに見ていくと、寺子屋での学習に使われたと思われる教本を多く見つけることができます。今回の企画展では「身のまわりの生活史 11 まなぶ」と題し、寺子屋などでどのような教本を使って、どのような学習がおこなわれてきたのかを紹介します。この展示を通じて、江戸時代の子どもの、学びの一端に触れていただければ幸いです。

最後に、これまで古文書をはじめとする貴重な資料の数々を寄贈、寄託等してくださいました皆様に厚く御礼申し上げます。

令和元年 5 月
宮代町郷土資料館

～ 凡例 ～

1. 本書は、令和元年 5 月 11 日（土）から 7 月 7 日（日）まで開催される、宮代町郷土資料館 令和元年度第 1 回企画展「身のまわりの生活史 11 まなぶ」の展示図録です。

2. 展示開催期間中の休館日は次の通りです。

5 月 13・20・27 日、6 月 3・10・17・24 日、7 月 1 日

3. 展示の企画及びポスター・図録の執筆執筆、写真撮影、デザイン、編集等は、当館学芸員 横内美穂が担当しました。。

4. 図録の構成は、展示構成とは異なります。また、掲載した写真の大きさは任意のものです。

5. 会場及び本書中の敬称は省略させていただきました。

6. 資料提供・協力者一覧（五十音順・敬称略）

新井隆夫・岩崎俊男・岩崎文庫・折原静佑・矢部豊・渡辺惣一郎・渡辺文雄

7. 特に参考とした書籍やホームページなどについては下記のとおりです。

☆石川松太郎「藩校と寺子屋」教育社歴史新書 87 1978 年 6 月 20 日第一刷

☆久保田信之「江戸時代の人づくり 胎教から寺子屋・藩校まで」教文選書 日本教文社

昭和 63 年 3 月 25 日 初版

★往来物倶楽部 http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/index0urai.htm

★東京学芸大学附属図書館 HP デジタルアーカイブ学びと遊びの歴史

<http://library.u-gakugei.ac.jp/digitalarchive/archivetop.html>

江戸時代の子どもと学習

寺子屋^{てらこや}とは、町人や村民などの庶民の子弟に対して、読み書きなどを教えた場所です。実は、寺子屋という言葉は主に江戸時代の上層（江戸から京都や大阪などの畿内、あるいは近畿地方を示した言葉）で使われた表現で、江戸やその周辺では「筆学所」とか「手習所」などと呼ばれました。（この展示では、用語として「寺子屋」を用います。）

寺子屋での学習過程は、地域、時代、身分、階層、性別などだけでなく、教えを受ける子ども（寺子）の性格や、教える側の師匠の力量によってさまざまであったそうですが、そうした中にも一般的な流れがあり、それは下記の順になるそうです。

いろは → 数字 → 名頭^{ながしら} → 村名・国尽^{くにづくし} → 諸証文
→ 用文章^{ようぶんしょう} → 諸往来 → 法規類 → 漢籍

しかし、寺子屋においてはこうした学習の初歩からだけではなく、しつけや行儀作法に至るまでの幅広い内容が指導されていました。寺子屋の師匠は、子どもたちにとっては、地域における生涯を通じた指導者であり、師匠と子どもたちとのかかわりはとても深いものであったと思われます。

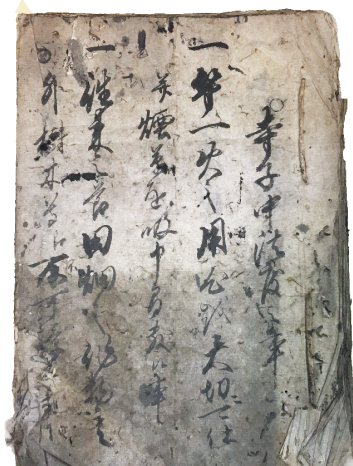


1. 教本台と初学古状揃

江戸時代
矢部氏寄贈

2. 初学古状揃

万延2年（1861）
渡辺家文書



3. 寺子中法度

江戸時代
渡辺家文書



4. 掃除番

安政5年（1858）5月
岩崎家文書

安政5年（1858）の寺子屋での掃除当番の順を示したものと思われる。途中、「紙くづひろい」とある「紙くず」とは、手習いで使用した紙（反故紙）のことであろう。江戸時代、不要となった文書用紙は漉きなおしによって再生されていたが、その材料として買取を行う商人がいたので、不要となった紙を子どもたちに集めさせていたのかもしれない。

筆子塚と天満宮（天神社）

町域においては、寺社や路傍、墓地などに見られる「筆子塚^{ふでこづか}」や「天満宮（天神社）」の存在が注目されます。

「筆子塚」とは、指導者であった師匠が亡くなったときなどに、教え子たち（筆子）が建てた墓碑（記念碑）です。また、天満宮（天神社）は、学問の神様とされる菅原道真を寺子屋の守護神として祀るようになったことから、「寺子屋があった」とか「天神講があった」といった寺子屋に関連のある言い伝えが残っている場合も多いものです。そのため、「筆子塚」や「天満宮（天神社）」のある周辺地域には、寺子屋が存在した可能性があるといえます。



天神社（和戸沖の山）



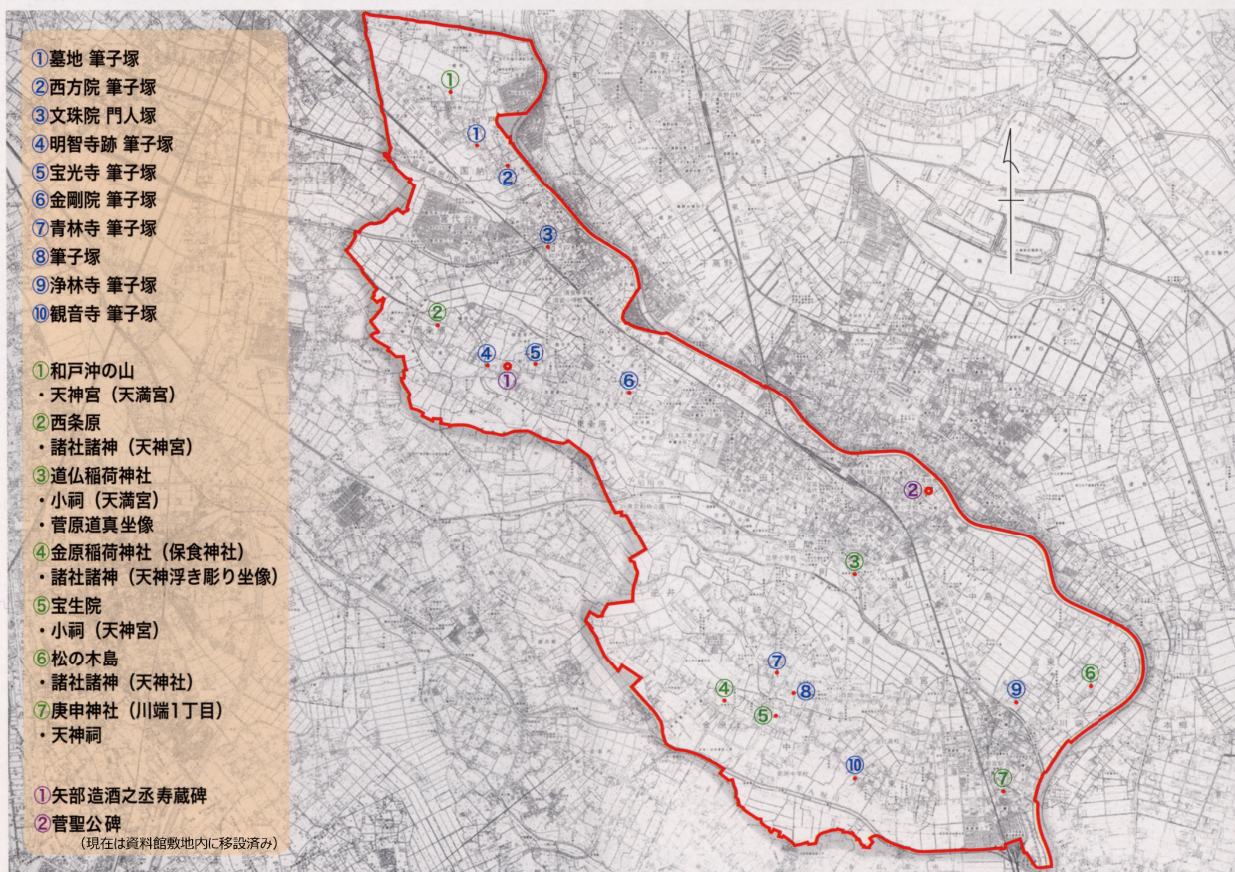
天神像（金原 保食社）



齋藤紫山 筆子塚（西原）

町域における筆子塚・天満宮（天神社）の分布

宮代町史資料集「社寺総合調査Ⅰ～Ⅴ」より作成



さまざまな往来物

寺子屋での教育が盛んになっていった江戸時代には、さまざまな形式や内容の往来物おうらいものが著されました。

往来物とは、平安時代に編まれた手紙の模範文例集がその始まりです。鎌倉時代になると、文例だけでなく、手紙に必要な単語、句、短文などを集めたものも編まれるようになり、教科書としての機能を持ち始めました。江戸時代になり寺子屋の広まりとともに、この形式ならに倣ってさまざまな内容・目的で作成・刊行されました。当時に必要とされた内容で師匠が独自に作成する場合もあったため、その総数の把握は不可能、と言われています。現在確認されているものだけでも、5,000 種とか 7,000 種といったような数字がみられることから、その膨大さがうかがえます。

また、これまで多くの研究者によって、往来物の分類が試みられてきました。内容による分類項目としては、消息しょうそく、教訓、産業、地理、歴史、語彙ごい、社会（公民）、理数、女子などが挙げられています。しかし膨大なうえに、その内容もいくつかの項目が関係していることが多いため、なかなか誰もが納得できる分類というのは難しいのかも知れません。

宮代町郷土資料館で収蔵している資料の中に、どのような「往来物」があるのか紹介します。



南北朝時代に作られた往来物の一種。一年 12 ヶ月分で 1 ヶ月分には往復の手紙計 2 通を載せているので 24 通と、「八月十三日状」1 通の全 25 通から構成されている。手紙の模範文としてだけでなく、社会日常に必要な語彙ごいを類別に列挙している部分があり、これを習わせることも目的となっている。

江戸時代に寺子屋用教科書として盛んに学ばれた
5. 庭訓往来
文化 9 年（1812）11 月
折原家文書

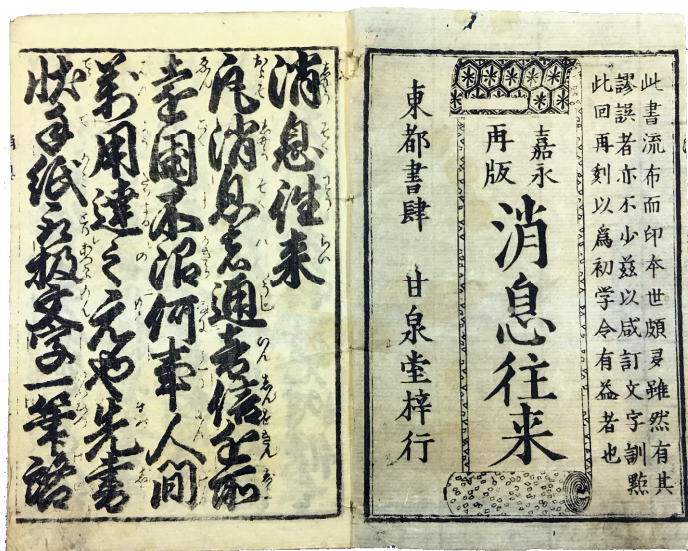
で、おびたしい数の版が刊行された。

9. 女庭訓往来

江戸時代
渡辺家文書

江戸中・後期に広く普及した女子用の往来物。年中行事の故実を中心とする教養であったり、女性としての言葉遣いや心得などであったりと、女性としての知識・教養・心得の習得に重点を置いて編まれている。





11. 消息往来

嘉永 3 年 (1850)
岩崎家文書

消息とは、人や物事の
その時々^{そのとき}の有様や動静
のことを示す言葉だが、
その意味が転じて状況

や用件などを手紙などで知らせること、あるいは手紙
そのものを示す言葉である。つまり「消息往来」とは、
消息＝手紙の往来＝往復（やりとり）を学ぶための
ものである。

作者は不明で、内容から室町時代初期の作と推定
される。五条・九通から構成される武家用の消息手
本。しかし、江戸時代になると消息文に常用される
単語・短句・短文をあつめた用語集的なものが同じ
書名で公刊され、版を重ねるだけでなく多くの類書を
輩出した。

明和 3 年 (1766)
に江戸で上梓された
のが最古といわれる。

15. 百姓往来

文化 8 年 (1811) 3 月
岩崎家文書

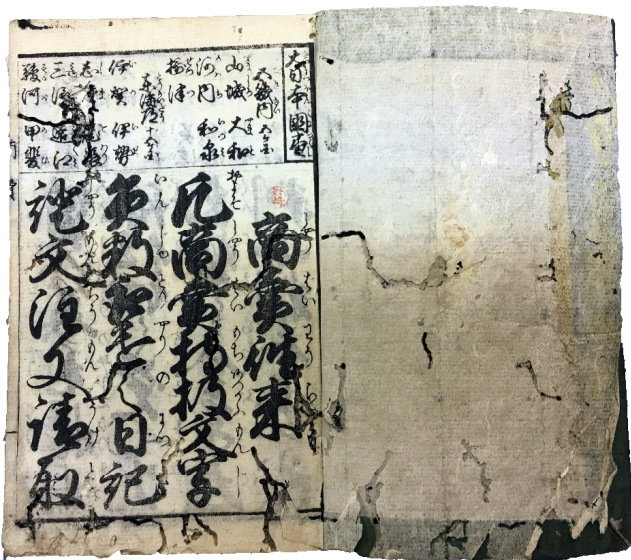
作者は大坂の禿箒子^{とくそうし}。編集の方式は「商売
往来」に倣い、内容の多くは「田舎往来」から
採っている。内容は、(1) 農業道具 (2) 新田の
開発・検地 (3) 水損・旱損^{かんそん}などの手当て (4)
検見・貢納 (5) 肥料 (6) 巡見の際の心得 (7)
荷物の貫目 (8) 家屋の造作 (9) 機織具^{はたおりぐ} (10)
農家の常食 (11) 農家の副業 (12) 牛馬の種類
(13) 名所旧跡は古法に従うべきこと (14) 農民
生活の心得 といったもので、簡潔ではあるが、
農民にとっては要用の語句、言い回しなどが掲
載されている。



18. 商売往来

明治 2 年 (1869) 10 月
岩崎家文書

京都の手習いの師匠であつた堀流水軒の作で、元
禄 7 年 (1694) に大坂で刊行された。内容は、商
取引に関する帳面類、貨幣、商品、商人生活に必
要な教養・教訓の4つの部分から成っている。特に
衣料、食品食物、家財道具、薬種香料などの諸
分野に及ぶ商品関係語彙を 269 個も列挙していて、
商人生活の心得として、勤勉・節儉・正直の徳に
ついて強調しているのが特徴。



24. 近郷村名

万延元年（1860）

新井家文書



「近郷村名」とは「周辺地域にある村々の名前」という意味で、まさに「師匠が必要に応じて作成する」往来物の代名詞といえる。この辺りは武蔵国埼玉郡であり百間領でもあったが、内容は百間領を中心に周辺の主だった村々の名が記されている。



28. 文盛古状揃 全

元治元年（1864）8月

渡辺家文書

南北朝時代の武将・今川貞世（了俊）が、後嗣とした弟の仲秋にあてた家訓を骨子とする道德の教科書。学識と経験に富む了俊により、武家社会にふさわしい教訓の数々が易しくかつ率直に説かれていることから、江戸時代に入ってから道德の教科書として盛んに刊行された。また、この編集形式に倣って類書が多

く作られただけでなく、「女今川」などの女性の教養書も作られ、広く普及した。



27. 女今川小状揃

元文2年（1737）8月

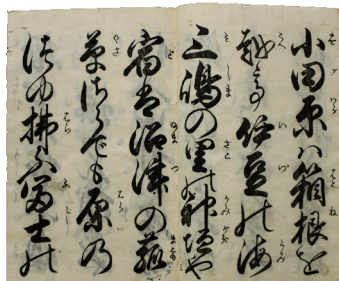
岩崎家文書

漢字を覚えるための入門書として、中国で編まれた。毎句4字で250句、一字の重複もなく千文字あることからこの名がつけられた。単なる字の羅列ではなく、内容的に一貫性があり、暗誦もできるように韻を踏んで作られているという特徴がある。その内容としては、天地の徳を讃え、その間に存在する人間、その中でも君子である者の徳政と修身の工夫を説き、列举される森羅万象から学問の要を勧めているとされている。

30. 千字文

明治時代

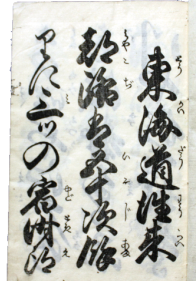
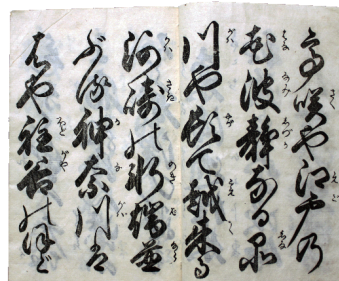
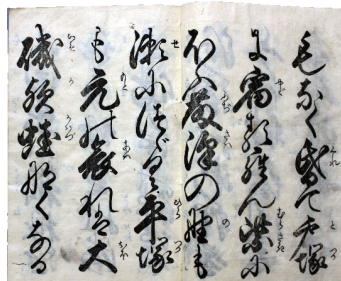
岩崎家文書



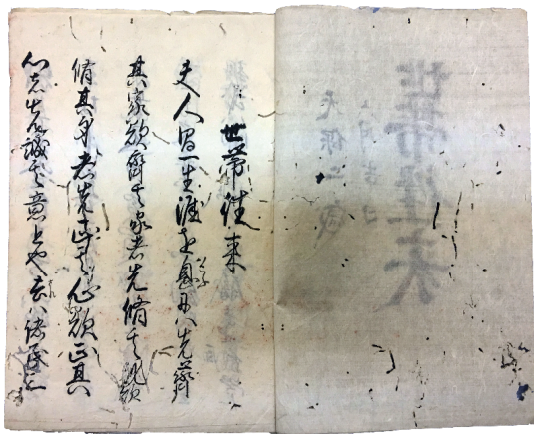
32. 東海道往来

江戸時代

折原家文書



作者は岡芳玄と推定され、宝暦4年（1754）には刊行されていたと推定される。「都路は五十余りにみつの宿（やど）、時（とき）得て咲くや江戸のはな、浪（なみ）静なる品川や・・・」で始まる書き出しだが、七五調に文字鎖の文章（五・七・五でワンフレーズとなっているが、赤字のように、その終わりと始まりの音が同じになっている）で東海道五十三次の宿駅名を列举している。



35. 世帯往来

天保2年（1831）6月

岩崎家文書

作者は不明。天明2年（1782）に刊行された。衣食住に関する知識と心得を中心とする。人間生活に必要な「三財」として衣

食住を挙げ、近所付き合いや家作普請、家財・諸道具、農工商の任務、などについて述べている。この世帯往来は刊本の本文のみを写したものであるが、「但一門九族の年忌法事を忘す勤る時は、其身堅固にして子孫繁栄なる事疑なし、疑なし」と、末尾まで書き写している。教材の一つとしようとしたものだろうか。

展示品リスト

	資 料 名	年 代	資料群名など
1	教本台	江戸時代	矢部氏寄贈
2	初学古状揃	万延2年（1861）	渡辺家文書
3	寺子中法度	江戸時代	渡辺家文書
4	掃除番	安政5年（1858）5月	岩崎家文書
5	庭訓往来	文化9年（1812）11月	折原家文書
6	庭訓往来講釈	弘化3年（1846）12月	岩崎家文書
7	庭訓往来	天保7年（1836）5月	岩崎家文書
8	庭訓往来	江戸時代	渡辺家文書
9	女庭訓往来	江戸時代	渡辺家文書
10	消息往来	天保9年（1838）	渡辺家文書
11	消息往来	嘉永3年（1850）	岩崎家文書
12	消息往来	元治2年（1865）正月	岩崎家文書
13	消息往来	江戸時代	折原家文書
14	消息往来	明治20年（1887）4月	岩崎家文書
15	百姓往来	文化8年（1811）3月	岩崎家文書
16	百姓往来	文政3年（1820）5月	渡辺家文書
17	百姓往来	寛政9年（1797）正月	岩崎家文書
18	商売往来	明治2年（1869）10月	岩崎家文書
19	商売往来	嘉永2年（1849）2月	新井家文書
20	商売往来	壬申（明治5年か）仲秋	新井家文書
21	商売往来	文久2年（1862）2月	渡辺家文書
22	商売往来	文久2年（1862）5月	渡辺家文書
23	商売往来	慶応元年（1865）6月	渡辺家文書
24	近郷村名	弘化3年（1846）	新井家文書
25	近郷村名	万延元年（1860）	新井家文書
26	名頭 近郷村名	文久4年（1864）正月	渡辺家文書
27	女今川小状揃	元文2年（1737）11月	岩崎家文書
28	文盛古状揃	元治元年（1864）8月	渡辺家文書
29	草書千字文	江戸時代	岩崎家文書
30	千字文 全	明治時代	岩崎家文書
31	江戸名所往来・江戸諸職往来、大坂独案内・隅田川往来・附七夕数字づくし	文化9年（1812）3月	岩崎家文書
32	東海道往来	江戸時代	折原家文書
33	義経勇壮往来	文政6年（1823）	渡辺家文書
34	自遣往来	江戸時代	渡辺家文書
35	世帯往来	天保2年（1831）6月	岩崎家文書
36	田舎往来	弘化2年（1845）	新井家文書